

キャラクター名
オーレリア・レヴァイン

プレイヤー名

種族	ヴァルキリー	種族特徴	戦乙女の光羽、戦乙女の祝福		
生まれ	乗り手	性別	女	年齢	15
冒険者Lv	4	経歴	己に何かしらの誓いを立てている(いた)		
経験点	290		大きな嘘をついている(いた) 物心ついた時には独りだった		

技	9	能力値	A-F	成長	他修正	能力値	ボーナス
		器用度	9			18 + 1	3
体	8	敏捷度	6			15	2
		筋力	7			15	2
心	9	生命力	7	2		17	2
		知力	6	3		18	3
		精神力	12	1		22	3

技能	Lv.	技能	Lv.
ファイター	4		
エンハンサー	2		
アルケミスト	1		
ライダー	4		

戦闘特技	
全力攻撃	1-286p
両手利き	1-283p
	p
	p
	p
	p
	p
	p
	p
	p
	p

言語	会話	読文
交易共通語	○	○
魔動機文明語	○	○

練技/呪歌/騎芸/賦術	
キャッツアイ	
マッスルベアー	
高所攻撃	
HP強化	
探索指令	
チャージ	
ヴォーパルウェポン	

技能	基本 レベル	基本 命中力	基本 回避力	基本追加 ダメージ
ファイター	4	7	6	6
グラブラー	0			
フェンサー	0			
シューター	0			

鎧と盾	必要 ランク	筋力	回避力	防護点
鎧	スプリントアーマー	15		5
盾				
その他補正(防具習熟/回避行動 etc)				
回避技能	ファイター	合計値	6	5

武器	用法	必要 筋力	命中 修正	命中力	C値	追加 ダメージ	威力	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ヘビーメイス	1H両	15	1	2d+ 8	12	6	20										
ストーン 射程10m	1H投	1		2d+ 7	12	6	6										
				2d+													
				2d+													
				2d+													
				2d+													
				2d+													
				2d+													

制限移動	通常移動	全力移動
3 m	15 m	45 m

回避	防護点
2d+ 6	5

HP
29

魔物知識/弱点	先制力
2d+ 7/X	2d+ 0

生命抵抗	精神抵抗
2d+ 6	2d+ 7

MP
22

魔法技能	Lv.	魔力	魔法技能	Lv.	魔力

装備品	説明
頭	
耳	
顔	
首	
背中	
右手 巧みの指輪	
腰	
足	
その他	

装備品	説明
左手 アルケミーキット	

その他メモ	自動失敗 チェック
ヴァルキリーの少女。貴族の家のお出でであり、どことなく高貴な雰囲気を感じている。実の父の所業に怒り、そのまま飛び出してしまった家出娘でもある。現在も家出継続中。聖職者(クレリック)Lv3/兵士(ソルジャー)Lv2/貴族(ノーブル)Lv5	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ⑤ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ⑩ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ⑮ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ⑳ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ㉕ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ㉑ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> ㉒
私はオーレリア・レヴァイン。レヴァイン家の長女だ。私の家は、この街を治める貴族。領地の一部で、大きな領地を持つ、力のある家。故に、そこに生を受けた私には、自由はなかった。身分に相応しい贅沢と、教育を享受して。しかしそこに家族の愛情は感じられなかった。父も、私を政治の道具としてしか見ていないようだった。——私は、孤独だった。そしてその頃の私は、愚かでもあった。叱られる事もなく増長し、選民思想に肩まで浸かっていた。そんなある日、ふと私は「きまぐれにそんな貧民共に施してもくれてやろう」と思い至った。貧民の楽園であるスラムがどんなものかも興味	

